

## バンコク地下鉄建設事業の環境への影響評価 ～インフラ事業への環境会計の導入～

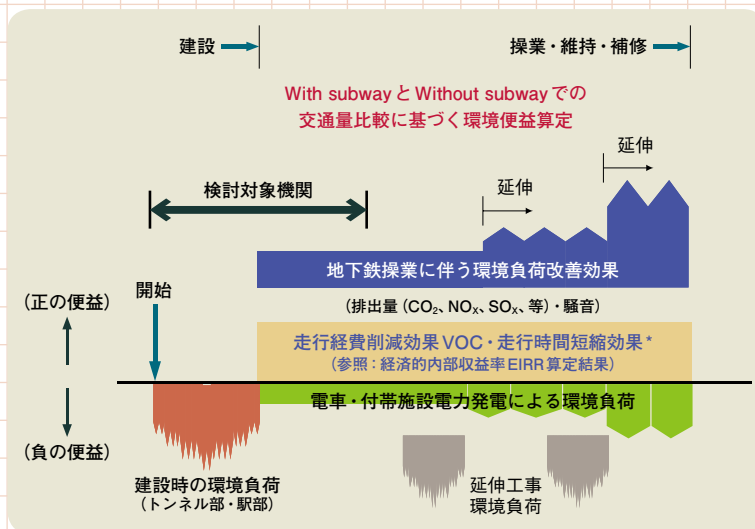
2006年度はタイ製造業等における省エネルギー政策推進に伴うCO<sub>2</sub>削減効果を環境会計を用いて推計しました。(テーマ別P.53参照)この経験を踏まえ、2007年度はタイバンコク地下鉄建設事業をケーススタディとし、インフラ事業への環境会計の導入を試みています。

バンコクにおいては、1990年代以降、急激な経済発展に伴う交通渋滞と交通渋滞に起因する大気汚染が顕在化しました。タイ政府はこの課題を解消するため、国家経済社会開発計画の下で、「堅実な経済成長を実現するための大量輸送交通網の整備」を目的としたマスタープランを策定しました。2007年度の事後評価対象の「バンコク地下鉄建設事業」は、上記大量輸送交通網の整備計画の一部であり、バンコク初の地下鉄であるMRTブルーラインとして2004年7月に開業しています(全長20km、18駅)。

今次評価では、京都大学の天津宏康教授に委託し、DAC 5項目に沿った事後評価に加えて、一般的には“地球に優しい交通機関”といわれている地下鉄のもたらす環境負荷について、プロジェクトライ

フを考慮した定量的評価を試みています。具体的には、1) 地下鉄建設段階でのトンネル部・駅部構築に起因する環境負荷、2) 地下鉄による交通量削減に伴う排出ガス・騒音削減による環境負荷改善、3) 電車・付帯施設電力発電による環境負荷を対象に、評価を実施しているところです(図1参照)。

図1: 環境負荷検討方針



## 琵琶湖の保全管理の経験を世界へ ～第12回世界湖沼会議などにおける知的貢献～

2006年3月に発表された「水と衛生に関する拡大パートナーシップ・イニシアティブ」において、わが国政府は、持続可能な水利用の確保に向けた開発途上国への支援を表明しています。

インド「ポパール湖保全・管理事業」にかかわる事後評価においては、DAC5項目評価に加え、統合的湖沼流域管理(Integrated Lake Basin Management: ILBM)の枠組み※によっても評価を試みました。

湖沼という閉鎖的な静水システムでの環境保全事業は、短期的な効果発現は限定的であり、流入する汚濁負荷の削減とともに、湖岸域や湖内の生態系環境改善のための長期的な取組みが必要

です。また、幅広いステークホルダーの長期的な参加も不可欠です。ILBMとは、このように総合的な取組みを推進する枠組みであり、琵琶湖の環境改善などわが国



実施機関の説明に熱心に耳を傾けるワークショップ参加者

の経験を踏まえて発展しました。

2007年10月末にインド・ジャイプール市で開催された第12回世界湖沼会議では、ILBMセッションを設け、当行の取組みを紹介するとともに、国連環境計画などの国際機関やドナーと、ILBMに基づく湖沼環境改善の取組みの重要性およびその課題について活発な意見交換を行いました。

さらに、同11月、世界湖沼会議での議論を実施機関にフィードバックするため、ポパール湖においてワークショップを開催しました。この際、インド国内および近隣諸国の湖沼保全専門家も招聘し、ILBMを具体的に推進するうえでの共通課題を議論するとともに、湖沼保全管理事業においてILBMを適用して事後評価を行う際の課題についても検討しました。

これら2カ所の議論を通じて、静水システムという特長を踏まえた湖沼保全管理事業の実施およびその事後評価においては、政策形成、組織体制、参加、科学的情報、技術、資金などの流域ガバナンスの強化といった多面的な取組み・評価の視点が必要だという共通認識が確認されました。

※ILBMの定義・概要についてはテーマ別評価(P.55)参照。